

翁蕉芭彰顯

第98号 令和6年12月

鷹一つ

見付けてうれし

いらご崎

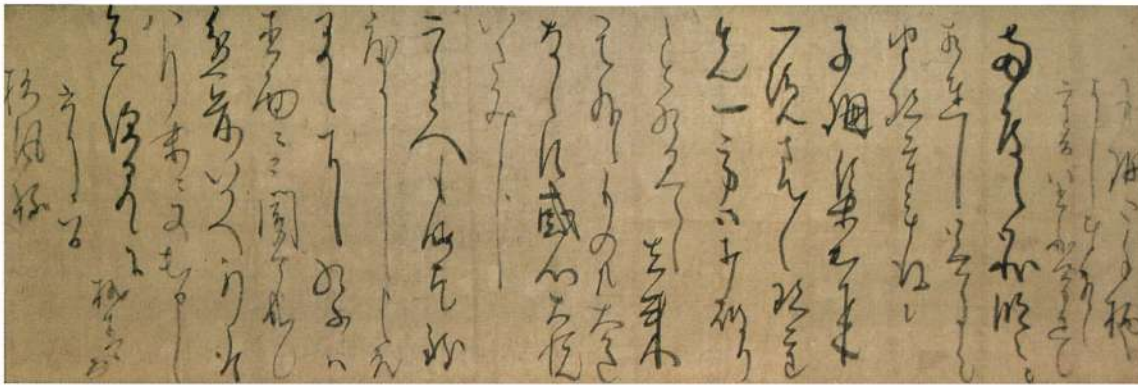
芭蕉



名品解説

元禄七年六月八日付芭蕉筆杉風宛書簡

元禄七年六月八日付芭蕉筆杉風宛書簡



元禄七年（一六九四）五月十一日、芭蕉は二郎兵衛という少年を伴い江戸を出発、五月二十八日に伊賀に帰郷し、その後、閏五月二十二日以降は京に滞在していました。この手紙は、嵯峨の落柿舎滞在中に、江戸の門人杉風さんふうに宛てて書かれました。杉風（一六四七～一七三二）は、日本橋小田原町で幕府御用の魚屋を営んだ鯉屋の主人です。蕉門最古参の弟子の一人で、生涯にわたり芭蕉の俳諧活動を支援しました。

この手紙は、先に二郎兵衛の母が亡くなったという知らせを杉風から受けたため、その返信として書かれたようです。手紙の後半には、二郎兵衛を先に江戸へ戻し、自分はお盆に伊賀へ帰ることが記されています。

こうした連絡事項に先立って、手紙の前半には、この年の五月、江戸の門人子珊しよんが杉風の協力を得て出版した『別座鋪』への称賛が綴られています。

さて、珍重。先一方は打破り候と相見え候。

（さてさて素晴らしい出来栄えで、従来の俳諧を打破ったように見受けられます。）

『別座鋪』は、芭蕉が晩年に熱心に説いた「かるみ」の風をしめす俳書として知られています。江戸には其角や嵐雪といった才能ある門人もいましたが、「かるみ」の風には関心が薄かったと言われています。そのようななかで、杉風は、古参ながらも芭蕉の新風に理解を求めし従ってくれました。この手紙の文言には、どのような時にも自身に付き従い支援を惜しまない杉風への感謝の気持ちも込められているものと思われまます。

（伊賀市文化振興課学芸員 服部温子）

巻頭句解説

貞享4年（1687）、「笈の小文」の旅のなかで訪れた伊良湖崎（愛知県田原市）で詠まれました。伊良湖の鷹は、芭蕉が憧れた平安時代の歌人西行も和歌に詠んでおり、この句はその和歌に名高い鷹を見ることができた喜びが表現されています。それと同時に、罪を得て当地の保美村に蟄居していた門人杜国と再会できた喜びも込められています。

翁蕉芭彰頭

第98号

編集・発行／公益財団法人

翁蕉芭彰頭会

〒518

0873

三重県伊賀市上野丸之内

1-7-13

／電話0595

・21

・4081